

一声の念仏で救われるのか、それとも数多く称えることで救われるのか……。この一念・多念の論争は、法然門下のみなならず親鸞を慕っていた関東の門弟の間でも大きな問題となっていたようである。一念であろうと多念であろうと、互いの主義主張に執着することは両者の溝を深めていくばかりである。

そこに親鸞が見たのは、念仏申すということの根本問題ではなかったか。すなわち、念仏は「法蔵菩薩の誓願の念仏である」という意識の欠落である。阿彌陀の誓願を信じていないから、そのような一念・多念という数の発想が出てくるのではないか……。つまり、一念・多念の論争は念仏における分限の問題である。親鸞は、一念も信心の問題、多念も信心の問題として、念仏の要は信心であることを述べている。ここに、念仏の回数や問題とするいわゆる自力執着の立場から、すべてを阿彌陀に任せるといふ他力への大転換がある。

（攝託研究員 法隆誠幸）

## 『唯信鈔文意』試訳 ⑱

### 原文

「不簡破戒罪根深」（五会法事讚）というは、もろもろの戒をやぶり、つみふかきひとを、きらわずとなり。このようは、はじめにあらわれり。よくよくみるべし。

「乃至十念 若不生者 不取正覚」（大經）というは、選択本願の文なり。この文のころは、乃至十念のみなをとえんもの、もしわがくにうまれずは仏にならじとちかいたまえる本願なり。「乃至」は、かみ・しもとおおき・すくなき・ちかき・とおおき・ひさしきをも、みなおさむることばなり。多念にとどまるころをやめ、一念にとどまるころをとどめんがために、法蔵菩薩の願じまします御ちかいなり。

「非権非実」（唯信鈔）というは、法華宗のおしえなり。浄土真宗のころにあらす。聖道家のころなり。かの宗のひとにたずぬべし。

「汝若不能念」（親経）というは、五逆十悪の罪人、不浄説法のもの、やもうのくるしみにとじられて、ころに弥陀を念じたてまつらずは、ただ、くちに南無阿彌陀仏ととなえよとすめたまえる御のりなり。これは、称名を本願とちかいたまえることをあらわさんとなり。「応称無量寿仏」（親経）とのべたまえるは、このころなり。「応称」は、となうべしとなり。「具足十念 称南無無量寿仏 称仏名故 於念念中 除八十億劫 生死之罪」（親経）というは、五逆の罪人は、そのみにつみをもてること、と八十億劫のつみをもてるゆえに、十念南無阿彌陀仏ととなうべしと、すすめたまえる御のりなり。一念にと八十億劫のつみをけすまじきにはあ

### 現代語訳

「不簡破戒罪根深」（「五会法事讚」というのは、諸々の戒を破る人も罪深い人も、分け隔てせず、排除しないということである。このことについては、すでに述べているので、よくご覧いただきたい。

「乃至十念 若不生者 不取正覚」（「大無量寿経」というのは選択本願の文（第十八願）である。この文の要は、阿彌陀如来のみ名を「乃至十念」称えるものが、もし私の国に生まれなければ、私は仏には成るまい、と誓われた本願なのである。「乃至」は、上と下、多いと少ない、近いと遠い・久しいをも、すべて収める言葉である。数多く念仏せねばならないとこだわる心を止めさせ、あるいは念仏は一回称えるだけでよいとする心を止めさせるために、法蔵菩薩が願われたお誓いである。

「非権非実」（「唯信鈔」というのは「法華経」を宗としている天台宗の教えであり、浄土真宗では用いない。聖道門の人の考えである。このことはその宗の人にたずねなさい。

「汝若不能念」（「親無量寿経」というのは、五逆・十悪を犯した罪人や私利私欲のために法を説いた者が、病の苦しみにさいなまれ、心に阿彌陀仏を想い念じることできないならば、ただ口に「南無阿彌陀仏」と称えよと勧めてくださいとあるみ教えである。これは、称名こそ本願の誓いである、ということを表わしているのである。「応称無量寿仏」（「親無量寿経」と説かれていたのは、この意味である。「応称」とは、称えなさいということなのである。

「具足十念 称南無無量寿仏 称仏名故 於念念中 除八十億劫 生死之罪」（「親無量寿経」というのは、五逆罪を犯した人がその身に背負う罪は、八十億劫という永きにわたって重ねられた罪のさらに十倍にもあたるほどのだから、十声、南無阿彌陀仏と称えなさいとお勧めになったみ教えである。もちろん、一声の念仏によってもそのような罪が消せないわけではない。しかし、五逆という罪の重さをしっかりと自覚させるために、あえて「十念」と言うのである。「十念」とは、ただ口に十遍の念仏を称えなさいということである。だから、選択本願を善導大師は「若我成仏 十方衆生 称我名号 下至十声 若不生者 不取正覚」（「往生礼讚」と言われるのである。これは、阿彌陀如来の本願においては、たとえ十声称えるだけでも皆往生するということを知らせようと、「十声」と言われるの

らねども、五逆のつみのおもきほどをしらせんがためなり。「十念」というは、ただくちに十返をとなうべしとなり。しかれば、選択本願には、「若我成仏 十方衆生 称我名号 下至十声 若不生者 不取正觉」(往生礼讚)ともうすは、弥陀の本願は、とこえまでの衆生、みな往生すとしらせんとおほして、十声とのたまえるなり。念と声とは、ひとつころなりとしるべしとなり。念をはなれたる声なし。声をはなれたる念なしとなり。この文どものころは、おもうほどはもうさず。よからんひとにたずぬべし。ふかきことは、これにてもおしはかりたまうべし。

南無阿弥陀仏

いなかのひとびとの、文字のころもしらず、あさましき愚痴きわまりなきゆえに、やすくころえさせんとて、おなじことを、たびたびとりかえしとりかえし、かきつけたり。ころあらんひとは、おかしきおもうべし。あざけりをなすべし。しかれども、おおかたのそしりをかえりみず、ひとすじに、おろかなるものを、ころえやすからんとて、しるせるなり。

康元二歳正月二十七日

愚禿親鸞八十五歳 書写之

(原文は、東本願寺発行の「真宗聖典」五五八―五五九頁)

### 試訳をめぐって

【原文】多念にとどまるころをやめ、一念にとどまるころをとどめんがために、法蔵菩薩の願じまします御ちかひなり。

【現代語訳】数多く念せねばならないとこだわる心を止めさせ、あるいは念仏は一回称えるだけでよいとする心を止めさせるために、法蔵菩薩が願われたお誓いである。

である。念と声は同じことだ、と知りなさいというのである。念をはなれた声はなく、声をはなれた念もない。これらの文の意は、十分に言い尽くしたわけではない。よく心得ているであろう方にたずねなさい。深い意味は、以上申し上げたことから推し量っていただけでしょう。

南無阿弥陀仏

都から離れたいなかの人は、文字というものも知らず、浅はかで愚かであることきわまりない。そのような人々が、よく心得られるようにと、同じことを、何度も繰り返し繰り返し、書きつけたのである。すでに心得ていると思っっているような人は、きつとおかしき思い、嘲るに違いない。そうではあるけれども、多くの人の誇りをかえりみず、ただひたすら、愚かなるものが心得やすいようにと、記したのである。

康元二歳正月二十七日

愚禿親鸞八十五歳 これを書写する

## 『唯信鈔文意』の現代語化を終えて

親鸞仏教センター囑託研究員 法隆誠幸

「数異抄」に引き続き行なわれてきた「聖典」の試訳、「唯信鈔文意」の現代語化であるが、四年半(二〇〇六年九月二十九日～二〇一一年四月十日)、延べ五十九回に及び研究会を経てその作業を終えることとなった。

本研究会は、異分野を専攻する研究員たちが集い、また立場も世もまったく異なる人々が一つの「聖典」試訳に取り組むというもので、そうして紡ぎ出された言葉がこのたびの現代語訳である。その過程においては、現代語化されることで原典のもつ迫力、文章のリズムといったものがスポイルされてしまわないかという懸念がいつも付きまわっていた。わかりやすさを求めれば、試訳は説明的になり、つまらないものになってしまう。何より、親鸞の意に沿うことを心がけながらもその意味内容を聞き進めようとするれば、そこには自ずと解釈が入り込んでいく。それでも、「現代」というフィルターを濾して試訳がつけられることには、少なからず意義があるのではないだろうか。

「唯信鈔文意」は、その奥書が示すように「いなかのひとびと」すなわち関東の同朋(≒生活者)に向けて書かれたものである。人間として共有したい、共に考えていきたいことがあるからこそ、親鸞は繰り返し繰り返し書き付けたのだらう。本試訳が、教えの言葉(原典)にふれる契機となれば幸いである。

本紙への掲載は今号をもって終了となる。すべての内容は再編集され今後まとめられる予定であるが、その際にはぜひ手に取っていただきたい。